行ってもらおうか。」

席に着くと、午前中に携帯で処理した発注をパソコンで確認する。電子化は進んでも、人為的なミスは起こりうる。地道な確認作業を怠ることはできない。

発注に間違いないことを確認すると、在庫管理システムで在庫を確認する。発注分はすぐにでも準備できそうだ。あさってには十分間に合う。あとは事務の山路に任せる。

<0:30p.m.>

森田が出社してきた。

「おはようございます。今日の大崎病院どうでしたか。」

「ええ、内科部長からの話だと、大崎病院もそろそろ再生医療始めたいと思ってるみたいです。今度、うちの細胞加工サービスの説明聞いてみたいって言ってたので、明日にでも、プレゼンに行ってこようかと思ってるんです。」

午前中の状況と浜田薬局への納品について、健太は森田に引き継ぐと、帰り支度を始める。

「河原さん、子供かわいいさかりでしょ。登夢君でしたっけ。」

「そうですね。やんちゃで困りますよ。今日も体当たりで起こされたし。それじゃあ、あと、よろしくお願いします。」

健太は時計を見る。1時。

部屋を出ようとしたところで、あっ、と小さな声を出して健太は振り返った。

「森田さん、申し訳ないです。**営業の車、水素入れといてください。**」

※環境問題に配慮した水素自動車が普及

vi

<0:30p.m.>

契約に関する回答書ができたところで、美咲は会社の電子決済システムに乗せる。最後に、**在宅勤務終了の手続きをする。**

※在宅勤務の時間管理

そして、軽く昼食をとり、家を出る。

この時間帯は、日に2度目の通勤時間帯にあたる。地下鉄は空いているとはいえなかったが、今日は運良く座ることができた。

※フレックスタイムや短時間勤務が普及し、お昼前後にも通勤時間帯ができる。

ふと目の前に立っている細身の女性の指に目が留まった。左の人差し指にリングをしている。

― あ、妊娠してるんだ ―

結婚すると左の薬指にマリッジ・リングをするように、妊娠が分かると夫から贈られた「マタニティ・リング」を左の人差し指につける習慣がある。

※働く女性が一般的になる中で、通勤などが大変にもかかわらず、周囲からは判断しにくい妊娠初期の女性にも優しい社会が確立。

「どうぞ。」

美咲は笑顔で声をかけると席を譲る。

「こんにちわあ。」
美咲が会社についてメールを開くと、「みけねこジョーイ」シリーズの翻訳を委託している今井から、シリーズ４作目「みけねこジョーイといじわるキツネ」の日本語原稿の初稿があがってきていた。

早速美咲は校正を進める。絵本は分量も少なく、文章自体難しくない。その分ごまかしがきかないとも言える。また、単純に日本語に訳すのは、何の苦労もないし、**翻訳ソフトも進歩**してるが、英語にはない日本語独特の微妙なニュアンスをいかに出していくかが腕のみせどころである。
話の中盤で「いじわるキツネ」のしゃべり方をどうするか、美咲は迷った。児童向けの絵本だから、あんまりキツい言葉は避けたいけど、キツネが何となく憎らしく思えるようなしゃべり方でないと話がつまらなくなる。美咲は一つ一つの言葉を吟味しながら校正を進めた。

美咲の会社はそう規模も大きくないので、日本語訳自体は外注に出しているが、１冊の本を出版するために、通常３人程度のチームを作って作業をしている。今回の仕事は、美咲は渉外業務を含め全体のコーディネートを担当しながら、美咲と**イギリス人のハート**が文章の校正、梨田がイラストを担当している。海外の絵本のイラストは、そのまま使えるものもあるが、日本人好みに多少手を加えなければならないこともある。

※日本企業と外資系企業とにかかわらず知的労働分野における外国人が珍しくない存在に。

「ハートさん、梨田さん、モニター見てくれる？」
美咲は原稿を共用モニターに映し出すと、チームを組んでいる二人に声をかけ、打ち合わせを始めた。

一通り読み終わると、ハートは、
「キツネのしゃべり方難しいですね。”YOU”一つとっても、日本語にはいろいろな表現があるし。」
とコメントし、梨田もうなずく。
「そうなのよ、下品にならないように、いじわるさを出すのって、難しいのよね。」
「根がいじわるな人だと、簡単なんでしょうけどねえ。」
ハートが腕を組む。
「総務の滝口さんに聞いてみようか。あの人さわやかにチクリと言うの得意でしょ。」
梨田がちゃかす。
「それは妙案ね。」
笑い声が響く。だいたい、いつも和やかに打ち合わせは進む。

<3:00p.m.>
文章がある程度固まったので、美咲と梨田は、イラストレーターのところに打ち合わせに出る。
「これだけ世の中進んでも、結局は直接目で見るしかないんですよねえ。」
「しょうがないよね。画面に写るのと、紙に印刷されるのとは、微妙に色合いとか違ってくるもんね。そこの微妙なところで梨田さんのセンスが生きてくるんじゃないの。」
美咲は、軽量電気自動車を走らせる。

※環境問題に配慮した軽量電気自動車の普及

社員の働き方はさまざま。
大自然をテーマにした児童書を専ら担当している社員は、自然が豊かな山村に居を構え、打ち合わせもテレビ会議で済ませていたりする。
社内には、名前を知っているだけ、又はテレビ画像で見たことあるだけ、という社員もいる。
しかし、最後の仕上げは、どうしても直接目で確認することが必要になる。美咲の会社では、これを「ナマチェック」と呼んでいる。
先の地方で山ごもりしている社員などは、「下山」、「世俗に出向く」などといってナマチェックのため出社する。

※ＩＴ化の進展で在宅勤務の選択が広がる。

イラストはほぼできあがっていたが、全般にもう少し柔らかいトーンにしたい、という梨田の意向で、微調整を続けた。
再度、来週、仕上がりを見ることにして、２人は会社に戻る。

vii

<3:00p.m.>
健太は、退社後、カラフルなヨットの浮かんだ水路を一望する眺めのいいレストランで、遅めの昼食をゆっくりとってから、家路につく。健太は、スーツ姿のまま、駅近くのスーパーに入った。**夫婦のうち、短時間勤務の方が、夕食当番である。**
携帯からアクセスし、インターネットで冷蔵庫の中を確認する。
さて、今晩は何にしようか・・・。
米や醤油といったストックがきくものや、牛乳などいつも欠かせないものは、**インターネットで農家や商店と直接契約して購入している。**
しかし、野菜や肉ばかりは、いつ何を使うか、その時々に考えるので、スーパーに足を運ぶことになる。直接目で見て選びたい、ということもあるが。
料理は、たまには面倒と思うこともあるが、２人の子供もおいしいといって食べるので、悪い気はしない。

※男女が家事を平等に分担

※ＩＴ家電の普及

※ＩＴ化により生産者等からの直接購入が増加

買い物を済ませると、健太は保育園に登夢を迎えに行く。**この時間子供を迎えに来る親は、健太のほかにもいるのだが、今日は迎えに来た他の親とは鉢合わせなかった。一方で、この時間に子供を預けにくる親もいる。**

※多様な働き方が普及するのに伴って、保育園の預かり時間も弾力化。

「どうも、高島です。」

健太の声を聞きつけて、登夢が駆けてきた。

「登夢、今日もちゃんとセンセイの言うことときいていい子にしてたかあ。」

登夢は、ぶんと大きくうなずいた。

「でも、ちょっとおもらししちゃったんだよねえ。」

今度は小さくもう１回。

「どうもお世話さまでした。」

健太は左手に買い物袋、右手で登夢の手をひいて保育園を後にした。

登夢は、道すがら、んーとね、と何度も前置きを付けて、今日の出来事を話した。健太は大げさに驚いたり、感心したりしてみせながら登夢の話を聞く。そうしていると、家にはあっという間に着いてしまう。

viii

<5:00p.m.>

「ああ、のど乾いちゃったよー。」

健太の背後で来夢が冷蔵庫を空ける。

「おい、帰ってきたら、ただいまだろう。挨拶はちゃんとしないとだめだぞ。」

オレンジジュースを注いだコップに口をつけたまま、

「ままいま。」

バツが悪そうに、来夢はおそらく「ただいま」と言った。

放課後、来夢は、週に３日はクラブ活動をして帰ってくる。足が早い来夢は、女子サッカー部に所属している。女子サッカーのプロリーグに憧れの選手がいたのが、サッカーを始めるきっかけだった。来夢は将来プロサッカー選手になることが夢である。

※小学生の遊び場と安全の確保のため学校の施設内で地域による子育て支援活動が活発

それ以外の日は、時間にゆとりがあるお年寄りや、中高生のボランティアが放課後の遊び相手をしてくれる。ボランティアといっても彼らは市からいくばくかの謝礼をもらっているのだが。

お年寄りが教えてくれる遊びは、最近の子供にとっては、むしろ新鮮に映るらしく、好評だ。学生ボランティアは、お兄さん、お姉さんといった感じで、子供に近い立場で遊んでくれるので、これはこれで好評。

※地域活動が、お年寄りの生きがいであるとともに、多少の収入源にも。

※中高生もボランティアの意識を高めるために、授業や課外活動でボランティア活動に取り組む。また、小さい子どもと遊ぶ貴重な体

高島家の場合には、学校が終わるころには、健太が家にいるので、部活がない日は、来夢が帰ってきてもいいのだが、来夢は友達と一緒にいることを選んでいる。
今日は、遊びの日だ。
「今日は何して遊んできたんだ？」
「おばあちゃんが、ゴム飛び、っていうののやり方を教えてくれたよ。簡単だけど、やってみるともりあがっちゃった。それからね、玲奈ちゃんと**校庭の芝生で寝ころんで**、雲を見てた。」

来夢は健太の脇から鍋をのぞき込んで、カレー、とつぶやくと自分の部屋に行った。夕食までに宿題を済ませないと、夜、テレビを見せてもらえない。

登夢はテレビに夢中になっているようだ。この時間帯のアニメは子供の間ではやっているらしく、登夢も毎日欠かさない。
健太はキッチンからリビングをのぞき、登夢の様子をうかがう。テレビに夢中で振り向きもしない。
「登夢、今日カレーだぞ。」
登夢は、ん、と短く返事をしただけだった。

電話が鳴った。美咲からだった。
「今から帰るね。」
午後６時。

ix

<9:00p.m.>
家族４人の夕食を終えると、健太は登夢を風呂に入れ、一緒にブロックで遊んだ後、寝かしつける。寝付きが悪いときは、美咲が絵本を読んで聞かせる。今日は、すんなり寝てくれた。

健太と美咲は、リビングでコーヒーを飲んでいる。
「次の本って、いつ頃出るの。登夢も楽しみにしてるんじゃないか。」
「そうね、まだ担当チームの中でも、揉んでる最中だし、あと２ヶ月くらいかかるかなあ。あなたの方はどうなの。営業って顔合わせる頻度も大切なんでしょ。」
「ああ、なんとか繋いでるよ。短時間勤務もあと２か月だからもう大丈夫だろう。」
「２人でフルタイムだと家計は楽だけど、子どもたちとの時間が減ってしまうね。」
「うん。ただ、来年来夢が**中学、スポーツの盛んな私立に行きたい**って言うと、少しお金かかるよなあ。それと、登夢が大きくなった

験の場に。

※校庭の芝生化は、子どもの安全とともに、子どもが外で遊ぶようになり、心身の健康によいことから推進。

※学校の情報公開が進み、学校の個性を見極めた上で選べる社会に。

ら、この家じゃ手狭だっていう問題もあるし。」

「そうね。**でも、もう少し子どもと一緒にいてあげたいな。あなたがフルタイムに戻ったら、私、在宅勤務を増やそうかな。**」

「おれだってフルタイムになってもできるだけ子どもと接したいと思ってる。一緒に頑張ろうな。」

※家族のライフスタイルや価値観に合わせた働き方が可能

テレビ電話が鳴った。美咲の実家の両親が２人並んで写っている。お互い顔を見ながら最近の出来事を話す。**美咲の両親は業界こそ違うが会社の上役でそれぞれ苦労しているようだ。**

先日驚かされた登夢の急な発熱のことを話すと、美咲も小さい頃たびたび同じようなことがあり、ハチミツ入りのホットミルクを飲んで寝ると良くなったそうだ。

※祖父母も共働きということが一般的に。

電話を切ると、美咲は、さて、とつぶやき、

「来夢に負けないように、私も勉強。」

と言いながらパソコンで海外の児童書の売り上げをリサーチする。最近、大して大きくない出版社が発行した本が、本国で映画化され、その本も爆発的な売り上げを記録したことがあった。青田刈りで版権を手に入れることはリスクもあるが、当てたときのメリットは大きい。**年俸にも大きく跳ね返ってくる。**

※能力や実績に応じた報酬体系が普及し、プライベートな時間に自己研鑽する場合も。

一方の健太も書斎に入り、薬剤師の勉強を始める。薬剤師の資格は必須ではないが、商品知識と医者とのやりとりでの耳学問では限界がある。説得力のあるセールスには専門的な知識が必要だと常々感じていた健太は、短時間労働を単なる子育て期間ではなく、ちょうどいいステップアップの期間とも捉えている。

健太は小さい頃「**お医者さんになりたい**」と言っていた。今から医学部に入り直すことはとてもできないが、薬剤師になることができたら、人と薬に関わる**会社を興して**、人の健康に役に立つ仕事をしたいと思っている。

※2001年小学生がなりたい職業の男子第３位（第一生命調べ）
※働き方として起業を目指すケースも増加。

そして、いつものように高島家の一日は終わる。

x

土曜日。休みの日は、いつもより朝寝坊できるささやかな楽しみがある。

また、**今日は夫婦２人でサイクリングに行く予定**である。

※育児期間中も２人の時間を大切にする夫婦が増加

家族４人の朝食を終えたころに、**いつも育児シッターをお願いしている大学生の甲野が到着する。月に１、２度夫婦２人で出かけるのだが、そんなときは、家で育児シッターに子供２人の面倒をみてもらうことにしている。**

※育児シッターが普及
※家庭教師などとならんで、大学生のアルバイトのひとつに

「いつも２人でお出かけ、いいですねー。仲良くてうらやましいな。あとは任せてください。」
「３時間くらいして、お昼過ぎの１時半ごろには帰りますんで、よろしくお願いします。」
柔らかな日差しを浴びながら、風を切る。爽快。
木々の緑、空気の香り、そよ風に揺れる花びら、あらゆるものに春の優しさが漂っていた。

サイクリングは、２人にとって、単なる共通の趣味にとどまらず、特別な意味を持つ。

２人が出会ったのは、大学のサイクリングサークルだった。
このサークルでは、月に一度、サイクリングに出かけることになっていたのだが、目的地やコースの選定は、持ち回りで担当するルールだった。
１年生の夏、健太と美咲は、クジでたまたまペアになり、目的地とコースの設定を担当することになったのだが、それまで、お互い特に意識していなかった２人が急接近するきかっけになった。

その後、**つきあい始めた２人は、やがて同棲をはじめた。**愛する人とずっと一緒にいたいから。しかし、同棲にはもうひとつ、**奨学金とアルバイトで学費や生活費を賄う**２人にとって経済的、という理由もあった。

※少子化により大学の学費が低下。
※奨学金制度の拡充
※高校卒業後、自立することが一般的に。
※同棲の増加

そして、**大学３年のとき、来夢が誕生し、それを期に結婚した。**
来夢の誕生は、経済的な影響が大きかったのは事実であるが、**手当など社会保障を受け**ながら、美咲も健太も割のいいアルバイトを選んで何とか乗り切った。親からは援助の申し出もあったが、できるだけ２人でやっていきたかった。

※学生出産、学生結婚の増加。
※出産・育児に対する社会保障制度の拡充

学内には、福祉学部の研修の場を兼ねた託児ルームがあった。社会に出た後、子育てをしながら通う大学院生を主な対象にしていたが、学部生の２人も利用させてもらった。

※社会に出てからも大学や大学院で学ぶ社会人が増加し、大学にも託児施設。

２人は自転車を走らせながら、決して雄弁ではなかったが、２人でいることそれ自体を実感していた。それで十分であった。
郊外の小さな湖がある自然公園が、今日の２人の目的地だった。湖畔で自転車を降りると、２人は眼前に広がる風景をしばらく眺めた。

春風になびく髪を軽く押さえながら、ふと、美咲は健太の方に顔を向けた。
「ねえ、フルタイムに戻ったら、そのままずっと通すの？」

健太は意外な顔をした。
「そうだな、来夢の中学もあるし、広い家にも住み替えたいし、それに将来の独立のために、今よりもう少し貯金したいね。まあ、短時間は、また子供ができるとかすれば別だけど・・・、んっ、どうしてそんなこと聞くのかと思ったけど、もしかして・・・。」
健太が微笑むと、美咲は、一呼吸おいて、少しおどけたように、
「マタニティ・リング、またほしいな。」
幸せそうな２人を包むように、ひときわ優しい風が通り抜けた。

x i

日曜午前９時半。健太はいつもより遅い朝食の準備をしている。**休みの日は、料理の得意な美咲が夕食を担当し、健太は朝食当番。**そういう約束。

※男女が家事を平等に分担

美咲は皿やカップを準備した後、ソファーで新聞を読んでいる。
２人の子供はまだ寝ている。

「さて、そろそろ起こしてくるか。」
健太は、自分に気合いを入れるように、少し大きな声でそう言うと、子供部屋に向かう。
「おい、来夢、朝メシできてるぞお。」
来夢は、んんんとうなって、目をこすりながら布団から出る。

健太は登夢のそばにこっそりと忍び寄ると、布団をはがし、脇腹をくすぐった。
一瞬、きょとんとした登夢は、事態が飲み込めると、もがくように体をくねらせて笑い出した。
「この前のおかえしだー。」

今日は、「上田川クリーン作戦」に家族で出かける予定。
上田川は、地元を流れる川。２０世紀の高度成長期に汚れてドブ川と呼ばれたこともあったが、**２１世紀初頭から清流を取り戻そうという運動が起こり、いままで四半世紀にわたって活動が続けられている。現在では、蛍が生息する清流に再生し、地域住民の憩いの場となっている。**

※下水道等の普及、汚水処理技術の向上で、かつての清流が復活。

このクリーン作戦は、かつては、市役所の旗振りで行われていたが、今はボランティアの手に委ねられている。

※ボランティア活動の活発化

のんびりと朝食を済ますと、サンドイッチを持ち、４人で川へ向かった。
正直にいうと、**月に一度のクリーン作戦は、世の中のために、といった大それたボランティア精神から参加し始めたわけではなく、子供と一緒に川で遊ぶことが主な目的だった。同じ考えの親が多いらし**

※「親子で何かをする」ということを楽しむ習慣。気軽にボランティアという風潮。

く、来夢も友達ができて楽しそうだし、登夢も興味津々で河原を冒険する。そういった意味では、気軽な気持ちで参加している。

「みなさんおはようございます。えー、今日は、この場所から、松橋、すぐそこに見える橋ですね。あそこまで、河原と水辺のゴミ拾いをしたいと思います。」
リーダー格の竹田という男が、手の平をメガホン代わりにして、５０名ほどのボランティアに今日の作業を説明する。大小のポケットがしつこいほど装備されたベストから、竹田がアウトドア派であり自然を愛していることが伺われる。
「えー、それでは、始めます。ゴミ袋はこちらにありますし、軍手は忘れた方用にいくつか用意してありますので、使ってください。がんばっていきましょう。」

特にいつまでに終わらなければならない、という決まりはないが、おおむね昼過ぎに終わり、解散。午後は川で遊ぶというのが、暗黙のルールになっていた。

美咲と来夢が河原組、健太と登夢が水辺組にそれぞれ分かれてゴミ拾いを始めた。

美咲と来夢は、手も動かすけど、口も動かす、といった感じで、近所の人たちや同級生とおしゃべりに興じながら、作業を進める。
時折、そおなのよ、えーほんとにい、といった断片的な言葉や笑い声が響く。

健太と登夢は、水辺の生き物を観察しながら、ゴミを拾う。といっても登夢はゴミを探しているというより、川の中の生物を観察している。
ザリガニを見つけた健太は、慎重にその背中をつまむと、登夢に見せる。ザリガニは、抵抗してハサミを開き、振りかぶる。
「ほら、登夢、ザリガニだよ。ほら。」
登夢は、うお、と言ってじっとザリガニを見つめると、
「ざにがに、がおーってしてるねっ。」
といって鼻息を荒くした。

※親子で自然と触れ合うことで教育的効果とともに、人間性の涵養に。

集団で行動するとき、誰が決めたわけでもないのに、自然と取りまとめ役になる人が出てくるものだ。こうした人たちを中心にスムーズに作業は進んでいく。

午後１時を前に今日の作業が終わる。

「はい、みなさんお疲れさまでした。おかげさまできれいになりました。来月のクリーン作戦につきましては、上田川ボランティア・ネ

ットのホームページに掲載しますので、よろしくお願いします。それでは、解散します。」
竹田の表情には、達成感が見て取れ、うっすらとにじむ汗が、きらと光った。

x ii

ビニール・シートを広げ、河原で4人一緒に昼食を取る。
美咲と来夢は、今日仕入れた出口さんちの話やナナちゃんちの出来事を披露する。
健太は、それをふんふんと聞き、たまに相づちを打つ。
登夢は、自分に話を振られると答えるが、基本的には、さっき捕まえたザリガニがいるプラスチックの虫かごを見ている。美咲と来夢は、気持ち悪い、といやがったが、登夢はかなり気に入った様子。

※遠くまで足を伸ばさなくても、地元に自然があり、気軽に気分転換ができる。

昼食が終わると、４人でフリスビーを始めた。
そのうち、健太は、疲れたよ、といって、ビニールシートに戻り横になる。

３人は、しばらくフリスビーを続けたが、登夢がうまくできなくて、不機嫌になってしまったので、中断し、河原を散歩し始めた。

横になった健太の頭には、仕事のことが浮かんでくるが、せっかくの休みだし、と自分に言い聞かせ、ゆっくりと流れる雲を見る。

今、健太と美咲の2人は、十分に子供と接する時間を持っている。仕事は能力主義で楽ではないし、**健太が短時間勤務の分、収入は減っている**が、こうした日常を金で買っていると思えば、安いものだ。
来夢は、最近、健太とちょっと距離を置き始めた。男親から見ると、女の子は難しい。そのうち煙たがられるのかな。
登夢は、興味を持ったら、周りが目に入らない。こだわりを持って仕事に取り組んでいる美咲の事を考えると、登夢は美咲に似たのかもしれない。
つらつらと思いを巡らせるうち、健太は眠りについた。

※家族のライフスタイルや価値観にあわせた働き方が可能。
※時間当たり賃金は、能力や成果を反映したものとなり、１日の勤務時間による違いはなくなる。

・・・。
人の気配を感じて、健太はうす目を開けた。
にいと笑いながら、登夢がすぐそばまで近寄っている。
また何かやらかす気だな。
健太は目を閉じ、気付かないふりをすることにした。

(完)

第３部　２０２５年の家族の会話

１．社会経済

１－１　経済・暮らしぶり

技術革新の進展や新しい財・サービスの開発に伴う消費需要の掘り起こし、女性や高齢者の労働力化等により、少子高齢化の中にあっても経済が安定的に成長し、国際競争力も向上。社会保障負担も適正な増加幅になる等により、暮らしぶりは現行水準を維持。所得格差はそれほど拡大せず、犯罪も現行水準を維持。

妻：今度、相手に伝えたいことを考えただけで相手に自動的に伝えたり、見た映像を自動的に相手に伝える機械を日本の会社が作ったんですって。

夫：テレパシーみたいだね。携帯電話の技術も随分進んだね。今度、タイヤのない車もできると言うし。それらの技術は世界で大ヒット間違いなしと言われ、株価が高騰してるようだよ。

妻：産業の空洞化とか日本はアジアの田舎になるとかいろいろ言われてたけど、日本もがんばってるわね。そうそう、コンシェルジェサービスとかフードサービスとか在宅のサービスも充実して生活も楽になったわよね。

夫：社会保険料や税金も負担がめちゃめちゃ増えるんじゃないかと心配されたけど、今の水準に収まってよかったね。その機械が実用化されたらさっそく買ってみようよ。

（最悪シナリオ）

労働力の減少や高齢化による消費需要の低下から経済が低迷。産業の空洞化や大幅な円安が進行し、輸入品・海外旅行が高値の花に。社会保障負担の増大等により、暮らしが厳しくなる。低所得者の増加や所得格差が拡大し、犯罪が増加。

妻：また今年もマイナス成長だって。どんどん日本が貧乏な国になっていくわね。今は家電製品も自動車も韓国や中国の会社の製品ばかり。しかもすごく高いのよ。それに買い物に行っても老人ばかりで活気がないのよ。売ってるものも年寄り好みのつまらない物ばかりであれじゃ買う気にならないわ。

夫：そういや大学卒業の時に海外旅行に行ったよね。君もブランド品を買いあさったりしていて、とても今では信じられないね。

妻：それなのに、どんどん社会保険料や税金ばかり高くなって、本当もう暮らしていけないわ。

夫：それに、隣の公園のホームレスも随分増えたよね。子どもを連れて遊べないよ。なんか儲かってる奴は儲かってるようだけど、どんどん落ちぶれていく人が増えてるよね。

妻：そう、犯罪発生率って世界一になったそうよ。安全な国日本はどこにいってしまったのかしら。

2．育児支援

2－1　多様な保育サービスの充実

延長保育を利用できる保護者が増えるとともに、在宅における良質な保育サービスも充実し、多様な就業時間に的確に対応。

上司:今日はちょっと徹夜で作業しなくちゃいけない状況だけど山田君は大丈夫かなあ。

妻：ええ、大丈夫です。（携帯を取りだし、夫に電話）今日はちょっと仕事で徹夜しようと思うんだけど、そっちはどう？

夫：今日はねえ、仕事は定時だけど、学生時代の友人と会うことになってるんだよなあ。１０時くらいには帰れると思うんだけど、ベビーシッターさんをお願いしようか。じゃあ、僕からベビーシッターセンターに電話しておくよ。９時までは保育所で、お迎えと１時間見てもらおう。

妻:私は仕事をしながらベビーシッターの様子をインターネット画像でチェックしておくわ。

夫：じゃあ、仕事がんばってね。

（一般的イメージ）

延長保育は増えるが、就業時間の多様化に十分な対応ができない状態。遠方の長時間保育を行う保育所に送り迎えをする親が増加。

妻：うちの会社、サービス業だから２４時間営業、年中無休でしょ。保育所はいくら延長保育とか言ってもこの辺じゃ８時、９時まででしょ。どうしよう？

夫：二駅先の駅前に２４時間の保育所がオープンしたけど、あそこに預けるとなると通勤時間が１時間増えるなあ。また、人気が高くて入れるか分からないよ。

妻：本当はベビーシッターとかにお願いできるといいんだけど。

夫：それは無理だよ。稼ぎのほとんどがなんだかんだ引かれるのに、ベビーシッターは補助がないからめちゃめちゃお金がかかるじゃん。ベビーシッターを雇うために働くようなことになっちゃうよ。仮に雇えたとしても虐待とかが心配だよね。

妻：もう仕事を辞めるしかないじゃない。